

「異文化理解力」（エリン・メイヤー著）を題材に議論する機会があった。本書の中ではコミュニケーションがローコンテクスト（言葉による表現を重視）なのか、ハイコンテクスト

# Smart Times

（暗黙の了解を重視）なのか、決断が台意方式なのか、トップダウン方式なのか、評価のフィードバックにあたっては直接的に伝えるのか、間接的に伝えるのか、など8つの視点から、日本、米国、中国、ドイツ、フラ



インディゴブルー会長

柴田 励司

1985年上智大文卒。マーサージャパン社長、カルチュア・コンビニエンス・クラブの最高執行責任者（COO）などを経て、2010年インディゴブルー社長、15年から会長。

を比較している。この国の人はおおむねこの傾向ではないかと言われると納得できる分析がなされている。日本人については、ハイコンテクスト

の国では最後まで相手の話を聞かずともおおむね趣旨が理解できる。意見がぶつかけあつた後に最後は動詞が来ると最後まで聞かないとわからない。いきおいコミュニケーションがリアクション型になる。行動様式を決定するもうひとつの要素である所属する国では最後まで相手の話を聞かずともおおむね趣旨が理解できる。意見がぶつかけあつた後に最後は動詞が来ると最後まで聞かないとわからない。いきおいコミュニケーションがリアクション型になる。行動様式を決定するもうひとつの要素である所属する

## 異文化理解で組織改革

行動様式がある若手からの斬新なアイデアがテア

コンテクスト、間接的なフールドバック志向、階層的合意志向で対立回避型と分析されている。そもそも文化なるものは目に見えない。文化と語られていることは、特定のグループ（地域、組織、コミニティー）の多くの人に共通する行動様式のことである。そのグループの中に語に続いて動詞が来る言語